



1991 年 (平成 3 年)
6 月号 (No. 553)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

- 新しく入会された皆さんへ
—オリエンテーションにおける
織内信彦名誉会員の講演から— (1)
- 海外の山 (2)
- 「七大陸最高峰」はどこ
ナムチャバルワ合同登山隊 日中
議定書に調印 (3)
- 『山岳』総合索引・1905～1990 年刊行の
お知らせ (4)
- 日本山岳会所蔵の地図類について (1)
- 東西南北 (5)
- 「84 歳 北極・グリーンランドを行く
(1)」「カラバタル便り (1)」ほか
図書紹介 (7)
- 「登山ガイド・大分百山」「三水会 15
年の歩み」「山道具が語る日本登山
史」ほか
- 自然保護随想 (11)
- 報告 (11)
- 「資料委員会より」「さくらハイク」
「三水会現地集會報告 房州・高宕
山」ほか
- 会務報告 (15)
- 評議員会、4 月理事会、ルーム日
誌、タンポチエ僧院再建協力募金
者ご芳名、新入会員 (復活)、住所・
住居変更
お知らせ (18)

新しく入会された皆さんへ

—オリエンテーションにおける 織内信彦名誉会員の講演から—

三月十六日開かれた新入会員オリエンテーションにおいて、織内信彦名誉会員が「日本山岳会とともに五十年」と題して講演し、新しく入会した会員が積極的に会の催しに参加してクラブライフを楽しむよう呼びかけた。以下はその要旨である。

(文責＝総務委員会・南川)

私の会員番号は一八四六番である。皆さんも自分の会員番号ははっきりと覚えておいていただきたい。

山岳会のクラブルームに入る時には署名をすることになっている。どこのクラブもそういうもので、その時に会

員番号も書くものである。日本山岳会でも前は書いていたのだが、この頃は乱れてしまい、乱暴に名前を書きながらぐちゃぐちゃのさえ見受ける。入室する時のサインであるから、キチンと名前を書いて、会員番号も書くのが本当だと思う。

署名といえ、かれこれ二十年ちかく前、ロンドンで英国山岳会を訪ねたことがある。私がビジターとしてサインをしたところ。秘書のミセス・ロンランドさんが、私がサインしたサイン帳の二、三ページを開けて、「ご覧なさい」という。そこには、サイン帳の中央に「エリザベス」とサインを

してあり、そのページの右下に小さく「エジンバラ」と書いてある。私は大変感激し、許可を得て写真に撮ってきた。もちろん女王はビジターであるが、日本では会員であっても皇族が直接自筆でサインすることは考えられない。英国の伝統とともに、英国山岳会の権威のようなものを感じさせられたのである。

私が山岳会に入会したのは昭和十五年だった。その時のクラブルームは虎ノ門の交差点脇の不二屋ビルにあり、三階の向い側には蠟山政道、松方三郎、松本重治氏ら進歩的な社会経済学者の集まりである東京政治経済研究所があった。格調の高い雰囲気漂っていた。日本山岳会はまだ貧乏していたから小さな部屋が二つあるだけで、十二人〜三人が集まれる程度の談話室と「隣に四五百冊の本の並んだ図書室がある

から、私はそこで大先輩である木暮さんをはじめとして松方三郎、浦松佐美太郎、藤島敏男、角田吉夫氏ら錚々たるアルピニストを知ることができた。役員が交替で会員の話し相手をするという形が、当時のクラブライフの一つのアプローチになっていたと思う。そういう場面を通じて役員の面識を得て、入会を勧められた。私としては入会に際し創立者である小島烏水さんに紹介者になってもいいと思っ

た。当時の小島さんは、私とは親子以上に年齢の違う大先輩であったが、紹介者になることを快く引き受けてくれた。私は小島さんに紹介者になってもいいことを大変光栄に思い、会員として小島さんの迷惑になるようなこと—会費を滞納するとか、会で悪いことをするとか—は絶対にしてはならないと肝に銘じた。今日まで五十年という

り、私は入会する前から時々本を見せてもらいに行っていた。当時の日本山岳会では、役員が当番制で詰めていて、来室する会員の相手をしていた

お知らせ
セレーフ電話

3234
六六五九

海外の山

「七大陸最高峰」はどいつ。

長丁場を乗りきって永年会員になることができたのは、そうした気持ちの支えがあったからだ、今になって思う。小島鳥水さんについて少し触れると、「鳥水」という雅号のいわれは、「鶴の真似をする鳥、水に溺れる」という言葉による、と直接伺ったことがある。岡野金次郎氏とともに登山者として初めて槍ヶ岳に登り、やがてウエストン師との劇的な出会いから日本山岳会の設立となり、八十五年の輝かしい歴史を刻んできた。

さて、このオリエンテーションの目的は、新しく入会された皆さんにクラブライフを楽しんでもらうことにある。日本山岳会は、会員相互の連絡懇親をはかるということが、会の重要な目的の一つにあげられているから、会員はその目的に沿うように努めなければならぬと思う。ちかごろ会員同士があげつらったり、会員に不快感をあたえるような言動が見えたりすることがある。いささか残念なことであり将来のために気になるところである。

クラブライフを楽しむには、何といても会を利用することだ。それには、この頃はやりの言葉でいえば、ハードとソフトがある。ハードはクラブルームで、集会所、談話室、約一万冊の蔵書を有する図書室である。上高地には山岳研究所と称する宿泊施設が

先日、東京で開かれた山岳関係シンポジウムで、興味深いやりとりがあった。

「最初の七大陸最高峰登頂者」と、カナダのパトリック・モローが名乗ったのに対しアメリカのディック・パスが「それは私ではないか」とやんわりクレームをつけたのだ。

七大陸の「最高峰」とはどことどこなのか、が問題だった。

エベレスト（八八四八メートル）マッキンリー（六一九四メートル）アコンカグア（六九六〇メートル）キリマンジャロ（五八九五メートル）ビンソン・マシフ（四八七九メートル）は、問題ない。アジア、北米、南米、アフリカ、南極それぞれの大陸にさらに高い山はない。

ヨーロッパ大陸となると少し難しい、一応ソ連中央カフカスのエリブルース（五六四二メートル）とアルプスのモンブラン（四八〇七メートル）が、その対象となっている。

ややこしいのは、オセアニアである。オーストラリア大陸だけを考えればコジオスカ（二三三〇メートル）という山になるが、モローは違う山を選んだ。インドネシアのニューギニア島イリアン・ジャヤ州のジャヤ峰（五〇三九メートル）である。

「七大陸」の発想を先に実行したのは、石油ビジネスとスキー場経営に手腕を発揮していたバスだった。一九八三年に計画をスタート、八五年、二度目のトライでエベレストに最高齢記録（五五歳）で登頂、念願をなし遂

げた。

モローはマッキンリー、アコンカグアの後、八二年にエベレストに登り、「七大陸」を考えた。八六年五月、ジャヤ峰のカルストン・ピラミッドに登り、それを達成、ギネスブックには、こちらが「七大陸最初の男」と記録されている。

地図で見ると、オーストラリア大陸のヨーク半島とニューギニア島は百キロ余の海峡を隔てるのみで、その最深部は十メートル足らずである。水面下の大陸を含めれば、同じ大陸と言えるわけで、オセアニアの山と考えられたい。車でも頂上近くまで行ける「行楽地」のコジオスカと違って、入域許可を得るのも難しい秘境の山であることも、この山の魅力の一つだろう。

大陸とは何か、を考えると結構難しい。大体、エベレストもエリブルースもモンブランも「ユーラシア大陸」の名でくくってしまえば、一つの大陸のはずだ。或いは逆にインド亜大陸は地質的に独立した地形と言えないことはない。

「五大大陸最高峰」を初めて登ったのは植村直己だった。南極までは手が出ないまま彼はマッキンリーに消えたが、その後時代は一層進んだ。

ニューギニア島のロブ・ホール、ギャリー・ボールのペアは昨年「七ヵ月で七大陸最高峰（コジオスカを含む）」との大胆な計画を電機会社の応援でぶち上げ一九九〇年十二月三日、ビンソン・シマフに登ってそれをやったのけた。

旅の山の時代になった。

（江本良嘉伸）



議定書調印式風景

ある。そういうものを積極的に利用することだと思う。ソフトの面でいえば、会には多くの催しがある。毎年十二月の第一土曜日に開催する年次晩餐会をはじめいろいろな集會、講演會、研究会などに積極的に参加することである。

また、毎月第三水曜日に集まる三水會、毎週土曜日に、雨に降られた山小屋の無為を楽しむような土曜會など、年中そういう場所に出ていると、自づから人目について、何かと仕事を頼まれるようなことになる。そうなるとう会にのめり込むことになるわけで、私もそういう経過を辿っている。日本山岳會の仕事をやらされてきた。

ほとんど使いの荒い所はない、一文の報酬もなく会のために時間を割いていた。それは、時として楽しむどころか、苦しみであった。クラブを俱樂部と書くのはいり得て妙であるが、会に

ナムチャバルワ合同登山隊

日中 議定書に調印

今秋、未踏峰では世界最高峰のナム

チャバルワ峰(南迦巴瓦峰)七七八二(一)初登頂を目指す日本山岳會と中国登山協會による、一九九一年ナムチャバルワ日中合同登山計画の議定書調印式が、五月一日、日中両国代表者が出席して東京のパレスホテルで行われた。

調印式では山田二郎・本會會長、史占春・中国登山協會主席の両山岳団体代表と、共催団体代表の清水正夫・日中友好協會全國本部理事長、水上健也・読売新聞社副社長がそれぞれ署名、調印後、伍紹祖・中国国家体育運動委員會主任(スポーツ相)、桜内義雄・衆議院議長ら立ち会い人を交えて記念撮影をし、出席者全員で、本隊の成功を誓い合った。

また、引き続き開かれた調印祝賀パーティーには、山岳関係者を中心に約百五十人が出席し、遙かなチベット

のめり込むとむしろ苦しいことが多くなってくる。苦しんだり楽しんだりする部も、読みようによってはクラブであり、日本山岳會はそういうところだと思えば間違いない。

談議に花を咲かせた。

この議定書調印で今秋に予定されているナムチャバルワ峰への日中合同登山計画は正式に決定したわけで、準備活動もいよいよ本格化することになった。

この日、正式に日中で同時発表された本隊登山計画によると、合同登山隊は中国・チベット自治区のラサを経て九月末にナムチャバルワ峰西面のベイスキャン(標高三五二〇)入り、十月から十一月にかけて、かつて中国隊が試みたナイブン・ルートから初登頂を目指して挑戦する。

頂上をうかがう登山隊は、日中双方それぞれ六名ずつの少数精鋭で、ナイブン峰頂上(七〇四三)付近の第五キャン(C5)までは、従来の極地法をとり、C5からコルを経て主峰に達する長く、急峻な主稜線は、アルパイン・スタイルで一気に攻める予定。日本側の登山隊長は重廣恒夫氏、登攀

隊長には高見知成氏が、中国側も隊長はサンジュ氏(チベット)、登攀隊長は陳建軍氏のベテランが努めることになった。

ナムチャバルワ計画の目的は、初登頂と日中友好促進、登山技術の向上のほか、日中国交正常化二十周年記念として実施されるもので、とくに中国側関係者は国家的事業として力を入れている。

このため、登山隊の上部組織として総顧問、名譽総隊長、総隊長、副総隊長が設けられた。ラサに設置される指揮部の任務は、日中双方の総隊長(山田二郎、洛桑達瓦氏)と副総隊長(村木潤次郎、王鳳桐氏)があたることになった。

日中登山隊は、昨秋実施した合同偵察でナイブンからのアタックルートを確認、重廣隊長自身、初登頂成功への十分な手応えをつかんだ点は心強い。世界の登山家が注目する山だけに、今回の日中合同隊の素晴らしい成果が待たれる。

なおこの挑戦計画は、中国登山協會、日本山岳會、日本山岳協會、日中友好協會全國本部、読売新聞社の五団体主催、日本放送協會(NHK)、外務省、文部省の後援として実施される。

(島田公博)

『山岳』総合索引・一九〇五～一九九〇年 刊行のお知らせ

大森 久雄

当会の年報『山岳』の総合索引を作成する作業が大詰にきている。『山岳』の索引は、過去に二回刊行されているが、その二回目からもすでに二十余年が過ぎ、新しい索引を待望する方々が多かった。

前二回の索引は『山岳』記事の検索に大きな助けとなり、特に『山岳』のように刊行が長い年月にわたり、しかもその大半が入手困難という刊行物の場合、索引の存在は絶大な威力を発揮していた。しかし、二回に分かれていること、編集、検索方式が異なることなどの不便もあったので、『山岳』が第八十年号を迎えたのを機会に、総合版として全く新しい構想のもとに編集することにした。山岳編集委員会では、図書委員会岩渕泰郎氏（東洋大学図書館学）の全面的な協力と指導のもとに本格的な総合索引をめざすことにし、数年来、検討と作業をすすめてきた。『山岳』収録の各事項はもとより、雑報欄の記述にまで目を配って、かつてない詳細・的確・簡便な索引をめざしたが、そのために、検索やカード整理は膨大な作業となり、当初の予測

を大幅に上まわる圧倒的な労力を必要とすることになった。このため一編集委員会のボランティア活動的作業では手に負えないこととなり、専門出版社の協力を得ることとして、索引編集と販売に経験の深い緑蔭書房（社長南里知樹氏）に全面的な支援をお願いした。第一年第一号から昨年末刊行の第八十五年号まで、人名、事項名、山名など、それぞれをクロスチェックできるように編集しており、出版界の他の総合索引にくらべても遜色のない、最高レベルのものでできることとなった。『山岳』編集に長くたずさわった、過去の索引編集の事情にもくわしい望月達夫名誉会員には序文を寄せていただいたが、世界のどの山岳会にもない出色の総合索引との評価を得ている。刊行は五月下旬を予定していたが、作業が多少遅れているので、正確な刊行期日は改めて誌上報告させていただく。今度の「総合索引」は、各公共図書館、大学図書館などにも購入してもらうことを予定しているが、一般にも緑蔭書房が販売する。極めて少数数のため、予価は二万八〇〇〇円。山岳会会

員には特別割引価格を用意する。また、各支部にも最低一部を備えていただくよう、手配する予定である。

長い歴史を積み重ねてきて、これなくして日本の山岳界の動向は知り得ないといわれる『山岳』だが、その宝の山に分け入るための基本資料が索引である。歴史と、先人たちの業績とを正確に振り返ってみることは、新しい時代をめざすときの最低の条件の一つである。古い書物を読むことは懐古趣味でもなければ、復古主義でもない。今日の山登りを、また自分自身の山登りを、しっかりとした基盤の上におくために必要なことなのである」と、かつて松方三郎氏は書いた。そうした姿勢を保ちつづけるために、今度の『山岳総合索引』を十二分に活用してくださるよう、切に願います。

日本山岳会所蔵の

地図類について(1)

児玉 茂

日本山岳会が所蔵する地図類に関する紹介は今までに一度も行われたことはありません。このたび資料委員会の資料整理の一環として地図類を整理しリスト完成しましたので、この機会に珍しいと思われる地図の紹介をさせていただきます。

なお、リストはページ数の関係で掲載できませんので、ご希望の方は事務所までお申込み下さい。

所蔵地図を1実測図、2編集図に分けて順を追って紹介することといたします。

実測図

日本の地形図作製の所管は参謀本部から陸地測量部、地理調査所、国土地理院へと移り、およそ百十年の歴史があります。

現在は二万五千分一地形図が全国をカバーする基本図ですが、その前は五万分一がそれに相当し、さらにその前は二万分一で全国を覆うという計画がありました。このように実測した基本図で全国を一刻も早く覆うことがこの事業の目的ですが、その一方で必要に応じてそれぞれの時点で可能な地形図の製作を行ったために様々な種類の地図が残ったということです。

相模野の基線測量から始まった三角測量の開始は明治十五年頃で、その測量成果が地形図として現れるのは「正式二万分一地形図」で明治三十年代です。この間に「迅速測図」や「假製版」二万分一地形図が作製されています。同じく五万分一地形図の場合にも「迅速測図」や「假製版」があります。万五千分一の「假製版」もあります。この「假製版」地形図という用語は

文字通り、後に正式な地形図を作製する前の「仮りの」という意味の他に、「緊急の要請」で作ったものや、「測量は未完成」ながら出来ている部分だけでも発行する(図郭内に空白部がある)、というような異なった意味をもっていることがそれぞれの地形図から判断できます。

「二万分一迅速測図」は関東平野一帯で明治十三年から十九年にかけての短期に図解図根測量によって作製されました。例えば日本山岳会のある「麹町区」や「内藤新宿」は明治十三年測量で当時の様子を知る良い手掛りになります。この地図群は今では希少な歴史資料ですが、日本山岳会には二二三枚、折れ目のないきれいな地図が揃っています。

(財)日本地図センターから先頃この地形図の測量原図(原色刷)が完全複製されたのは興味深いことです。

同じく歴史資料としては明治四十二年測図の東京市街地区の「假製版一万分一」地形図(二色刷)十九枚が所蔵されており、「二万分一迅速測図」から三十年後の東京の発展ぶりをうかがい知ることが出来ます。

明治四十年代に発行された「北海道假製五万分一」は特殊な来歴を持った地形図として注目できます。陸地測量部による北海道の三角測量はずっと遅

れて明治四十年代から開始され、大正末に終了となりますが、軍事上の意味もあって既に作られていた地形図を当面假製版として発行しています。北海道は北の辺境として開拓が計られますが、地形図作製はそのための基礎というところで明治七年から北海道開拓使がお雇い外国人に依頼して三角測量と地形測量を行い、その後北海道庁地理課が短時日のうちに広大な土地の地形測量(五万分一)を完成しています。陸地測量部はこの測量原図をベースに明治二十九・三十一年に製版し、修正を加えて発行したものです。日本山岳会が所蔵する六十一枚のうち、「登別岳」図幅のように修正版とは言え全く北海道庁の測量原図そのままのものがありませんが、他は陸地測量部による異質の地形測量の成果を部分的にモザイク状にはめ込んだ珍妙な地形図になっています。

北海道庁が作製した地形図は、一般には二十万分一の「北海道実測切図」として刊行されたもので、発行は明治二十・三十年代です。二十万分一の縮尺となれば地形も地名も詳細で、その明るい色調(三色刷)とともに大変美しい地図になっています。日本山岳会にはこの「北海道実測切図」全三十二枚が揃っています。

明治初期において地形図作製の所管

はまだ一本化されておらず、参謀本部系の他に内務省と農商務省そして北海道庁でそれぞれに行われていました。内務省地理局は後に参謀本部に統合されますが、農商務省は大正年間まで独自に地形図を作製していました。

当時農商務省隷下にあった地質調査所が発行した地形図は、四十万分一「大日本豫察地形図」と二十万分一「大日本地形詳図」の二種類があります。この地図群は本来が地質図のためのベースマップとして作られたもので、測量原図は五万分一で作られました。ところが、当時の地質調査の進展状況から見ても二十万分一より縮尺を大きくすることはできなかったでしょう。

発行年も明治二十年代という早い時期で、縮尺は小さくとも北海道を除く日本全国をカバーしており(南は九州まで)、地名も豊富で標高測定も数多く行われていますので、最も重宝がられた地図でした。またこの地図群には英文版も作られており日本を訪れた外国人に利用されたようです。

この地質調査所の地形図は先の北海道庁のものと同じシリーズの地図と言える仕様ですが、それは地質調査所で地図を作った人が後に北海道庁でも仕事をしていたためです。

この地図の作製にあたっては、参謀本部が行った三角測量の成果を一部で

利用したと思われますが、明治十三年頃から「迅速測図」と同様の方法で東北地方の測量が開始されましたが、「迅速測図」が関東平野に限られていたのに比べ山岳地帯を含めて「全国津々浦々を踏査・測量し」て作られました。「地形詳図」の第一作目である「伊豆」図幅(明治十七年発行)の等高線は半円の集合のような角のあるもので、後の図副の滑らかな曲線とは随分違い、まだ不器用な感じがします。翌十八年にはこの地形図の上に地層境界を表示し色をのせた「伊豆」地質図幅が発行されています。

― 続く ―



八十四歳
北極・グリーンランド
を行く(1)

岩本美津雄

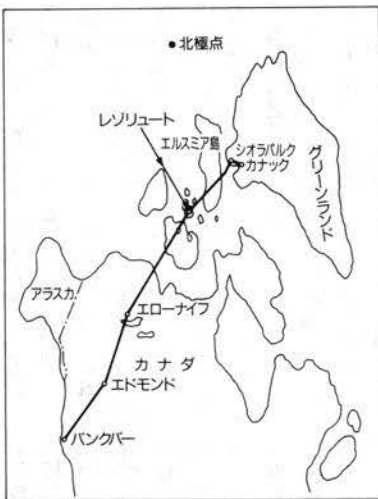
一九九〇年の四月から五月にかけて、和泉雅子さん案内の「グリーンランド北極圏ツアー」に参加、水原旅行

を体験しました。

出発地点はカナダ最北端の集落、レゾリュート。北緯七十五度に位置するコリンウオリ島にある集落で、ここから十五人乗りのチャーター機でグリーンランドに渡り、地球最北に人が住むシオラパルクという二十戸ほどのエスキモーの小集落（北緯七十七度四十七分）まで行きました。滞在はシオラパルクの南約六十キロのエスキモー約五百人が集まっていたカナックでした。

この地方一帯には、私たちが訪れた時、夜中でも太陽の沈まない白昼々たる大自然でありました。海は氷原となっていて、所々に高さ百メートル以上にも突き上げる氷山が立ち並び緑色に輝いていました。この氷原を犬橇が走る光景の素晴らしさには圧倒されるばかりでした。

橇一台に犬十二、三匹。私達はこれ



に現地の案内者一人と客二人で乗りました。吹く風は肌を突き刺す強いもので、氷原はこの強い風に波打っていて、頑丈に出来ている橇も、凍りつく氷原の凹凸に打ち碎けるかと思うほどの衝撃を受けながらの旅になりました。

犬は足が短く頑強で、案内者の命令通りに集まり、「伏せ」「走れ」「右・左」等の号令を聞き分け、確実に動き、また、「伏せ」をしている時も案内者の次の命令をじっと待つ姿勢をとり続け、可愛い目で案内者の顔を見つめているようでした。本当によく訓練されていたのに感心しました。それでも、私達には「絶対に犬に近づくかしないように」と注意がありました。

エスキモーの住家は毛皮のテント張りと思っていたが、現在では全部木造家屋で北欧の落ち着いたペイント塗りでした。北極圏は立ち木が全くないので、建具は鯨の骨を利用していたそうで、数ヶ所に遺品として記念に残してありました。彼らの集落には、強力な火力発電機、水道、石油による暖房（室内温度十五度程度）、室内や廊下にカーペットを敷き詰めた小学校、教会、病院、郵便局、スーパー等々まで完備してありました。

我々（十二名、内四名添乗員）は、グリーンランドのこの地方初の旅行者だったようです。ホテルなどはないので民家三ヶ所に分宿し、私の班四名はデンマークの役人宿舎として新設し、まだ誰も住んでいない施設を使わせてもらいました。ここも暖房、水道、シャワー室、湯沸かし機まで完備していました。ただトイレはバケツで、落とした中身は戸外へ放り出せば途端に凍るのです。集めて回る人がいるそうです。

食事はエスキモーの有力者の家で、料理は奥さんがなかなか上等なのを作ってくれました。時々アザラシ、セイウチ、鯨、イルカ、ジャコウウシ等々の肉も食べました。なかなかいける食事でした。家具調度、額、原書がぎっしりの書棚、エスキモー女性の作った素晴らしい細工もの等々飾ってありました。ここでの数日はホテルとは異なった情愛のこもった日々でした。主人四十五、六歳の好人物で、三ヶ所で家庭用品、ラジオ、電気製品、銃等の売店を経営しておりこの集落の有力者のようでした。――続く――

カラバタール便り(1)

一九七九年十月小原勝郎氏と二泊。
一九八八年五月四、五日二泊、三回合

同隊のエベレスト登頂の無電傍受目的でK大OBの鈴木嶋夫氏と共に休業中のエベレストビューホテルに泊る。今回で三回目の宿泊。山も宿も変わっていない。変わったのは人間だけ。ネパール政治も一寸変わる。

七十一歳になって独りでのエベレストのトレッキングは、老人の冷水と冷笑されるが、笑へば笑へ。笑うJACの山男の若者も、笑われる日も近いことを知れ。笑って、足腰立たぬ時はどうするか。歩け、登れ、頑張れ。

編集宛 (山本朋三郎)

春の褒章と叙勲

一九九一年度春の褒賞と叙勲に際し、次の会員の方々が、その栄に浴しました。

〈藍綬褒章〉

●沢村幸蔵氏（会員番号六四二番、本会評議員、日山協副会長）

〈勲二等瑞宝章〉

●橋本誠二氏（会員番号二〇一八番）
本会前北海道支部長、第三次マナスル登山先遣隊員、北大名誉教授

△ △ △

南アルプスの村に

湯場開場の資料が

田畑 真一

北岳(三一九二m)などを村内にもつ芦安村(望月義清村長)で、文久元年(一八六〇)の湯場開場についての資料(「絵図」ならびに「御届書」)が見つかった。同資料(芦安村役場所蔵)によれば、湯場、つまり温泉の場所は御勅使川の左岸であった。現在の岩園館(小林九八氏)の向う側の川沿い、その崖の下であった。

明治三十六年、芦安村にやってきたウエストンも「翌朝われわれがその農家の点在する部落を離れ、喉ノ口という岩の狭い路において行った時、村長の建てた、今は岩見温泉という湯場を見た。これもまた、村長のエネルギーと公共心を更に証拠立てるものだった。鉄を含んだ微温湯が、高い絶壁の表面の穴から出て、竹のパイプで人工的に熱した湯舟に運ばれている。この湯舟のある建物に、この谷間の下手にある近隣の村々の年寄り連中が滞在しに来るのである」(ウエストン『極東の遊歩場』)とある。

私は村役場の村誌編纂事務局(斎藤宏貴氏)を訪れ、関係資料を拝借。これにより、現地を尋ねた。前掲の絵図

にえがかれている岩壁やその上部の樹木など現在とまったく同様である。一三一年も前にえがかれた樹木が同じ形で現在も成育している。眺めては感動を深くしたものであった。



図書

紹介

登山ガイド・大分百山

日本山岳会

東九州支部編

東九州支部では、支部創立三十周年記念事業の一環として、この度支部会員の分担執筆による『大分百山』を出版した。

大分百山の選定については、既に十年前に行われ、創立二十周年記念誌に発表されているが、それ以来、支部例会山行として登りつづけて、ふるさとの山のよさを見直してきた。この度の刊行は、いわばその集大成とも云えるもので、これを通じて支部会員の仲間としての連帯意識をより強めようとの狙いもあったようである。

大分の山は、標高こそもの足りないが、山群毎にそれぞれ、地形や自然に

特徴があり、歴史につつまれた山並みは、何度登っても興味はつきない。

本書では、大分の山を十の山群に分け、梅木支部長自ら、山群の特徴について解説しているが、その豊富な知識と、豊後国誌、豊後風土記、万葉集などを引用した概説は、珠玉のように光っており、これを読んだだけでも行ってみたいくなる。

大分の山には、特徴のある山が多い。地型的にも、メサ、ピュート、トロイデと、この言葉を聞いただけで連想される山も多いし、ミヤマリキシマヤツクシシヤクナゲで有名な山もある。草原の山として想い出される山もあるし、ブナ林をはじめとする原生林に恵まれた山も多い。一方では日田杉として造林美で知られる津江山群の山もある。天台仏教、修験道のメッカとして、六郷満山の名で知られる国東半島の山々もある。

これら百山の個々の山については、当然のことながら最新情報をもとに正確に記述されており、ガイドブックとしては、大いに役立つ。

十年前に自ら選んだ百山の中、五つの山については、登山の見地から見ても適当でないとして入れ換えている点も評価できる。

また、大分の山には日出山岳、日出生台、一尺八寸山など、難解なものが

多いが、これら難しい地名、山名には、すべてルビがふられているのも親切である。

一方携行の便を考えて、小型のB6版を採用しているのも有難い。そのため統一を欠いている地図が、さらに小さく見難くなったのは、止むを得ないかも知れないが残念である。

なお欲を言えば、県外の利用者のためは、折込み付録の形で、百山の分布を概念図の上で示してもらえるとよかった。

私は昭和五十二〜五十七年にかけて、別府に住んでいたことがあり、その間支部の方々とともに、よく山行を共にしたつもりであるが、この百山の中登った山を数えてみると、約半分しか登っておらず、この点が心残りではない。本書が早く出ていたらと思われてならない。

県内や九州在住の方とはもとより、百名山愛好の全国の会員の方々にも、おすすめする次第である。

なお、この種の本は、定期的に改訂版を出すことが望ましい。最後にこのことをつけ加えさせて戴く。

一九九一年一月 本会東九州支部刊
B6版 二〇八頁 定価一三〇〇円
(送料二一〇円) 本会事務局若しくは東九州支部へ申込み入手できる。
(松田雄一)

三水区十五年の歩み

(社)日本山岳会三水区
創立十五周年記念誌
編集委員会編

庄巻は、昭和五十年五月二十一日の
発会式から、平成二年十月二十一日の
創立十五周年記念山行「景信山・高尾
山」に至る、三水区例会・現地集会一
覧であろう。

すでに物故された方も多いが、その
講師の豪華、多彩さには目を見張るも
のがある。

最近、その依頼に応じて、池田昭二
さんが、遠く山形から馳せ、講師を務
められたという。その他有形、無形の、
犠牲・奉仕ともいえる暖かい眼差し
が、三水区をここまで、支えてきたも
のと思う。

三水区十五年の歩みという題字も、
元会長・佐々保雄名誉会員が揮毫され
た。

本書は、三水区小史、三水区と私
の二部で構成されている。前者は、三
水区発足のいきさつや、恒例行事と
なった現地集会の生い立ちなどが紹介
され、後者においては、各人それぞれ
の三水区との出会い、結びつき、それ
にまつわるエピソードを記述されてい
る。アルコールにまつわる話題も豊富

だがここではあえて問うまい。

山田二郎会長は、三水区創立十五周
年を祝って、と題し、「此のようなク
ラブ・ライフこそが、日本山岳会その
ものであると云えるかも知れない。」
と述べられているが、日本山岳会その
ものに向け、着実に地歩を固めている
といっても過言ではないし、その意欲
が、十二分に誌面から窺い知ることが
できる。

平成二年十月十五日 (社)日本山岳会
三水区発行 A5版 本文一四四頁
領価一〇〇〇円 (高田眞哉)

山道具が語る

日本登山史

布川 欣一著

面白かった。時間が無駄にならない
本に出会えてよかった。

「登山史は怪物だ」という安川茂雄
氏の言葉を著者は引いているが、その
怪物を相手に堂々と取組んだこの本
は、まだ成熟していない日本のこの分
野の開拓に、新しい一歩を印した。

日本の登山史を真正面から扱った本
には、周知のように、山崎安治氏と安
川茂雄氏による二著がある。その内容
は、著者の布川氏が序論で的確に伝え
ているが、登山史に限らずすべての歴
史は、筋道たった表通りからだけでは

真実も事実もこぼれてしまうことが多
い。この点、先行二著が意識的に避け
て通らざるを得なかった角度から登山
の歴史に取組んだこの企画は、いい試
みだった。

登山は道具なしには成り立たない行
為である。というよりも、道具を積極
的に使用することによって幅をひろ
げ、前進する。工作人ホモ・ファベル
としての特長を最もよく表している行
為の一つが登山ともいえるから、道具
の持つ意味は大きい。堀田弘司氏の
『山への挑戦』(岩波新書)が面白い
のも、この流れを捉えているからだ。

本書の特長は、その「道具」の幅が
広くとられていることだ。「立山曼荼
羅」や播磨の遺品、遭難のメモ、日記、
本などもそのうちに含めてあるし、登
山道や山小屋も対象になっている。柳
宗悦の民芸運動に共鳴するという著者
の、山を見る広い視野によるものだろ
う。そして、信仰登山の時代からフ
リークライミングの現代まで、それぞ
れの時代をつくってきた人物や事象か
ら選び出された三十一の「道具」は、い
ずれも実証的な裏づけがあつて、たの
しく安心して読めるのがあるがたい。
雑誌連載がもとという。著者の手も
とには、この数倍の資料があるにちが
いない。しかし折角の面白さなのに、
あれ、これでおしまい!! と叫びたく

なるほどにスペースのないものがある
のは残念。写真の扱いも不当なほどに
小さい。写真は、この種の企画では有
弁な語り手のだから、これでは提供
者にもカメラマンにも気の毒、そして
読者には無念。少なくともB5判程度
ではあつて欲しかった。それに耐える
だけの十分な内容があるのだから。
一九九一年一月 山と溪谷社刊 二
三〇ページ 定価一八〇〇円 (大森久雄)

女子登攀クラブ

の二十年

一九六九〜一九九〇

福島由利子編

かつて、西アジア遠征隊と称して共
に海外の山に出掛けた仲間と久し振りに
顔を合わせる機会があつた。その席
で、「あれから二十年以上経ったね」と
元隊長が言ったが、もうそんなに昔
のことかと感慨深かった。

私たちに関西で女性だけの山登りを
しようと同人数組織を発足させていた頃
東京でも同じように考えていた人たちが
いて、女性だけのクラブを発足させ
た。それが久野、田部井さんたちの女
子登攀クラブである。彼女たちのクラ
ブが二十周年を迎えて記念誌を発行し
たが、同時代を過ごした者として興味

深く読んだ。特に前半の「女子登攀クラブの二十年」は、さながら女性登山史を見る思いがする。

私たちの先輩諸姉が富士山や北アルプスなどに第一歩を印した時期を女性登山の開拓期とするならば、自分たちの意志と力で独自の登山を目指した一九六〇年代後半から、女性だけの八千円峰登頂に成功した七〇年代半ばにかけては活動期とも言えるだろう。

六〇年代の半ばから、男性と共に登っていた女性の間から、テントキーパーや食事当番などの、いわば裏方の役割しか与えられないことに不満を持つ者が現れ、それを強く意識した女性たちが力を結集しだした。こうした女性たちが海外の山に目標を定めるには、それほど時間はかからなかった。まだ一丁三六〇円、持ち出し枠にも制限があった時代である。こんな時代背景のもとで活動してきた女子登攀クラブの二十年が、世の中の動きとからめて要領よくまとめられている。

彼女たちの動きは、本書でも述べられているように、ことさら声高に「女性の地位向上」を叫ばなかったが、素朴な願いから出た行動が、女性の意識改革へとつながっていて、このことは男性の登山では見ることでできない一つの現象である。本書をそういう視点で読むと、単に登山という狭いジャン

ルを越えて女性史の側面を物語っているとも言える。

後半の海外遠征の記録では、すべてを自分たちで解決しなければならなかった初期の手さぐりの時代を経て、円が強くなり旅行会社のツアーで海外登山ができるまでに社会が変化してゆく中で、海外の山を目指す女性たちの意識の変化もうかがえて興味深い。過ぎ去った二十年という歳月において、女性の社会的な立場に大きな変化があったことをこの記念誌は物語っている。

一九九〇年十二月 女性登攀クラブ
発行 B5版 一六六頁

(泉 久恵)

尾瀬 その風の中に

毎日新聞社
前橋支局編

かつて朝日新聞前橋支局編『はるかな尾瀬』(実業之日本社刊)が、尾瀬の全貌を紹介した本として評価されていた。今度、新版された毎日新聞同支局によるこの本は、その後の尾瀬を取材したものとして興味ぶかく読んだ。どちらも新聞に長期連載されたルポだから、版型こそ違え、目次はよく似ている。ただ前から問題視されていた保護と利用の問題が、開山一〇〇年を迎

えた折も折、入園料に代表されるような大きな論争を呼んだことが、この本では全編の底流となっている。

第一章、第二章では、尾瀬の動植物を紹介しながらも、至仏山の荒廃のために消えていくホソバヒナウスユキソウや、繁殖を続ける移入植物のこと、ウサギや野鳥の保護の陰で天敵キツネもまた増えていることなどに触れている。第三章では、忘れられた楽園アヤマ平や至仏山のお花畑の危機を取りあげ、目的のないツアーの増加を憂い入園料問題へと導いている。第四章では、山小屋のトイレや汚水処理など直面している問題、第六章で、尾瀬とかかわりのふかい人々を登場させている。

最終章「尾瀬を語る」は「尾瀬の自然を守る会代表で、尾瀬を守る懇談会と弥二郎小屋の橋良一氏との対談である。その中で、山小屋側から地元ヌキの提言に対する反発が出されると、地元には説明する」「説明を受けるのでなく、一緒に考えていきたい」という緊迫したやりとりが目についた。

尾瀬をめぐるのは、ダムや車道による自然破壊から守ってきたという歴史的事実がある。では、ここ数年間の論議は何だったのだろうか。この本を読むことは、自らの「尾瀬問題」を反芻するよい機会になるに違いない。

一九九〇年四月 毎日新聞前橋支局
編 あさを社刊 一八七頁 定価一五〇〇円 (蜂谷 緑)

京都山岳

(創立七〇周年記念号)

京都山岳会
実行委員会編

一九二〇(大正九)年十月三十一日に、第一回比叡登山(四十余名)で創立されたのが京都山岳会である。本会の一九〇五(明治三十八)年、カナダ山岳会の一九〇六年、一高旅行部の一九一三(大正二)年、京大・慶大の一九一五年、早大山岳会の一九二〇年十月と比較して、社会人山岳会の先駆者としてその七十年にわたる足跡が、この一本にも連綿として読み取れる。

毎月報「京都山岳」(十頁)が、例会案内と例会報告に終止して、低山歩きの先入観を与えるのに、本号はカラー白黒口絵写真七頁に、玉山、新青峰、マッキンレー、キナバル、アルプス・スキー登山、アンデス・プランカなど記念例会、個人山行が目白押しである。「京都山岳会のあゆみ年表」は、つまり京都岳界の歴史でもある。日本アルコウ会、飛弾山岳会、信濃山岳会など先輩があったとはいえ、現に活躍している会として、日本山岳会

に続くこと、本書が戦中、戦後の空白を経て、第七一年七八号にも及んでいる。因みに本会の『山岳』にあやかった会報名は、創立者がJACCの会員だったからと聞いている

一九九〇年十月二十八日 21×27センチ
一五五頁 50、60、70周年と会報稀
観特製版十部制作発行(阿部恒夫)

山岳ノート

藤本 一美著

一般の書店には並ばない私家版。著者は埼玉県狭山市に住み、都立高校の地理の教師を務めている。副題に「都会からの山及び奥武蔵・秩父の山と峠と里に拾う」とあるように奥武蔵研究会、日本国際地図学会会員の著者が長年同山域を歩き、雑誌、会報などに執筆したものの幾編かをまとめたものである。著者にはほかに『展望の山旅』

『続・展望の山旅』(ともに実業之日本社刊)の編著書があり、その詳細な山岳展望図は広く知られているが、本書にもそうした展望図が多く掲載され、山のパノラマ好きには見のがせない一冊である。

内容のごく一部をあげると「伊豆ヶ岳からのパノラマ」「ダイダイ坊の足跡伝説」「白谷沢水系滝名考」「棒の折周辺山稜誌」「秩父盆地第三系の低山

誌」「東京の北に見える山々」などが、とくに「埼玉県内のゴルフ場乱開発マップ」の一編がおかたの注目をひくに違いない。造成中、計画中を含めて、なんとという数のゴルフ場だろうか。自然破壊は押して知るべし、である。

本書出版のもともとの動機は、伊豆ヶ岳南方にゴルフ場計画がもちあがったり、西武飯能ゴルフ場計画を知ったためと聞く。そして、著者が愛し歩きつづけてきた里山の破壊されるのを防ぐ方法として里山の佳さの再発見を呼びかける目的があつたことと、その願いが結集している。

一九九〇年十月刊 B5版 一一六頁 希望する人は、一八六〇円(実費+送料)を〒350-13狭山市青柳63新狭山ハイツ4-504藤本一美あて。第二刷が現在一五〇部ほどあるという。本会図書室にも寄贈されている。

スコット南極探検日誌

スコット著
中田 修訳

南極点にはアムンセンが先に到達したが、記録の全訳はスコットの方が四年先に出版された。重要な極地文献であるスコットの南極探検日誌が、同じ

訳者の手で成された。

本書はスコットの第二次南極探検の日誌の全訳である。遺体とともに発見された日誌は一九一三年、他の隊員の記録とともに二巻で刊行された。日誌はその第一巻である。家族にあてた便りを要所に盛り込み、状況描写がより詳しくなるよう配慮されている。その部分もカッコをつけて訳されている。一九一〇年十一月二十六日、ニュージランド出発の日から死の直前の一九一二年三月二十九日まで、一年四ヶ月の記録が克明に綴られている。人が自分の行動を記録することの意味を考えさせられる。

基本文献の価値は、索引の有無と綿密さにより左右される。スコットは、彼の一次探検に同行し、その後極点まであと一步と迫ったシャクルトンをかなり意識していたようだ。

「シャクルトン」の項では彼の南極探検について触れた頁をあげている。一月九日にシャクルトンの最南点を越えたことがすぐ調べられる。人名や重要項目は、それらに関する小項目がさらに列記されていて、極地探検事典の趣きである。訳者のていねいな仕事ぶりと熱意が伝わってくる。訳者は翻訳について次のように語っている。

「読みやすい訳には警戒心がわく。スラスラ訳しているのにはごまかしが

感じられる。異なる言語だから読みにくい所があつて当然。意味の通じる範囲で原文の表現を直訳するように努めた。」と。だが、読みにくさは全く感じられなかった。首読すればすぐ解る。単なる探検記にとどまらず、生活のなかで何をどう書くか、という視点を本書を示唆してくれる。記録文学としての価値と意味をもつからである。

訳者の全訳への意欲と、それに応えた出版社に心が動かされる。訳者は現在、ピアリーとシャクルトンの全訳にも取り組まれていると聞く。今後がたのしみである。

昭和六十一年十二月二十五日 ドル
フィンプレス刊 発売明倫出版 四
五四頁 定価四八〇〇円

崑崙の秘峰 新青峰

京都山岳会
新青峰登山隊編

当初チベットのクラーカンリ中央峰が、一九八九年三月五日のラサでの暴動により、三月十五日以降入山不可となった。急拠、新疆ウイグル自治区と青海省の頭文字の新青峰(しんちんほう)主峰六八六〇に転進が決った。

本書は新青峰登山の公式報告書なのだが、遠藤京子隊長によれば、「五月

中旬の異常気象より、高度順化の失敗」で、五月三十日、第一五峰まで標高差三〇〇、六二一〇で時間切れとなる。ヒマラヤの碩学、薬師義美氏が「未登頂で翌年これだけの報告書を刊行したのは立派と絶讃されたとの由。

一九九〇年九月二十五日 21×27版 一二頁(カラー口絵八頁)表紙見返し地図ほか三葉 その他参考データ多数 残部僅少が残念

(阿部恒夫)

報告

資料委員会より

資料委員会が発足して四年を経過した。当初は本会に所属する山岳の資料を整理するだけで精一杯であったが、最近漸く少し余裕も出て来て、いろいろな資料を収集できるようになって来た。今年度は秩父宮家はじめ横家や各会員の方々からも多数の意義ある資料をご寄贈頂いたが、その詳細な受入報告に示めされている通りである。

日本山岳会は、わが国の山岳界を支えて来た諸先輩や諸会員で構成される伝統的な山岳会である。この意味で資料委員会においても、わが国の山岳界という、より広い立場に立って、国内的にはもちろん、国際的にも鑑賞に耐え、将来の山岳界の活性化にもつなが

「自然保護随想」

林業と自然保護

昭和四十五年から六年の六月だったと思う。村井米子さん(故人)から、林野庁の私のところに電話がかかってきた。

「近ごろ、さっぱり現われないじゃないの。いま上野の松坂屋。夏山相談所よ。みんないるから出ていらっしやい」

「みんな」とは、相談員として上京して来ている各地の山小屋のおやじさんたちのことで、私も三十年ごろ、東北の山を担当して出たことがあった。

早速顔を出したら、挨拶もそこそこ、秩父のAさん(甲武信小屋?)にたいへんな見幕でかみつかれた。奥秩父の原生林伐採は何事か、林野庁は何をやっているのか、というのである。村井さんも朝日新聞の「声」の欄に投書しておられたが、国有林の天然林伐採を非難する声が高くなりつつあったところである。私は林野庁を代表して怒られに行ったようなもので、いい面の皮だった

ような資料の収集を行ってゆくべきだと考えている。

この場合、まず問題になるのは、これら資料の展示や保管を行う場所が現在見当たらないことである。このため収集資料の大半を、大町山岳博物館、松本アルプス山岳館、神宮の秩父宮記念スポーツ博物館、六本木のスイスアルプス博物館などに寄託の上、展示保

が、このときから、林業と自然保護について、より一層考えるようになった。そして今でも考え続けているのだが、はっきり言えるのは、「林業の本質はコンサベーションであり、正しい林業は自然保護に通じる」ということである。

コンサベーションについては、本誌五三九号で麦倉さんが書かれているが、広い意味の自然保護の概念で、自然界の相互関係を支配する法則に従って、自然を調和的に利用するというもので、自然資源を正しい手段で管理し、保全をはかる、ということである。奥地天然林の大量積伐は、とても正しい手段の管理とはいえない。これは林業ではないのである。

森林資源の良好な管理をめざす林業はコンサベーションである。今ここで、正しい林業について述べる余裕はないが、具体的な例として、東大の北海道演習林の森林施業をあげたい。ここでは林道も細かく入り、伐採もたえず行われている。しかし、自然はみごとに保たれている。ドロ亀先生、こと高橋延清元林長の長年にわたる実績である。

(伊藤 敏)

管して頂いているのが実情である。

しかし将来はやはりこれらを一堂に集めた「日本山岳博物館」(仮称)が首都かその近郊に設立されることが望ましい。これはもちろん日山協とか地理学会、文部省その他各学会や各省庁との共同経営であっていいが、若しこのような施設が作られたとすれば、山岳愛好者だけでなく、一般国民や、

外国からの来訪者にとっても、十分意義のあるものとなるに違いない。総合的な山岳の啓蒙にもなり、次代のアルピニストに対してもインパクトを与える、このような施設を残すことは私達の義務でさえあると感ぜられる。

そのために、第二にこの際、価値ある資料を、それらが散逸してしまわない中に本会で集めておく必要がある

る。昨年南極のビンソンマシフに登頂、六太州の凡ての最高峰に立たれた田部井淳子会員は、南極の寒冷地で使用した装備一式を今後余り利用しないから、大町山岳博物館で展示してはと考えられた。これに対し当委員会では、もし一括して日本山岳会に寄贈して頂ければ、ご希望通り大町に寄託して同館で展示できる上、将来は日本山岳博物館の貴重な史的資料にもなると説明して、了承を得ることができた。

一方横有恒元会長が亡くなられた時、横家に対して当会から資料の提供をお願いした所、大町、松本、スイス博物館からも同様の希望が出されていた。そこで私共は一応当会に配分案を作ることを任せて頂き、山田会長にも加わって頂いて慎重に審議し、寄託原案を作成した。この原案は横未亡人はじめ、大町、松本、スイスでも了承されることになった。

昨年末の年次晩餐会々場では、秩父宮殿下並び横有恒氏の登山用品の展示が行われ、好評であったが、今後、何処かで、何かの特別展が開催されるような場合にも、資料が一括管理されていけば、より合理的な展示を行うことができる。

このような次第なので、某先輩なり、某登山隊、あるいは某登山グループの用具や記録の中、山岳的資料として意

義があると認められるものがあつた場合、まず当委員会に情報を伝えて頂くことをお願いしたい。その際、希望の展示先などあれば併せて伝えて頂くことにより、それらを十分考慮した寄託先が定められ、総合的な山岳的資料の蓄積も実現されて行くことになる。

第三にご理解頂きたい点は、これまで予算の裏付けがなかったため、収集は専ら寄贈者のご厚意に頼るばかりであつたことである。

たとえば大正初年上高地で写されたウエストンの写真に見られる、初代エルクの作になるいわゆる幻のピッケルが何処かの古道具屋で発見された場合とか、重要な文献や記録が古本屋の片隅で見つかったような場合、多少の予算は支出しても収集に加えて行きたいものである。

他にも山岳宗教に関する様々な資料とか、明治以来活躍して来た山案内人や強力、山宿の資料など、各地域に埋もれている貴重な記録も、数多く存在するものと思われる。

資料委員会では、このような資料も積極的に集めて、日本山岳博物館の核となり得るような収集に行きたいと希望している。会員諸兄姉におかれども、これらの事情もご勘案の上、当委員会に対し、できるだけ情報を提供し、ご意見などお寄せ頂くよう、ご協

力をお願い申し上げる次第である。

(中村純二)

さくらハイク

中川 尚

四月十四日新入会員の交流を計るためのさくらハイクが、新旧会員四十六人が参加して行われ、岩殿山に登りました。

岩殿山は山梨県の東部、中央本線の大月駅の北東にそびえ立つ標高六三四の山で、戦国時代に天然の要害と利用して、岩殿城が築かれた山です。

全員が十時三十分には大月駅に集合し、四十分頃から登山口に向かって歩き始めた。丁度町では桜祭りを行っており道には飾り付けがしてあった。岩殿山の岩壁と満開の桜を正面に眺めながら桂川にかかる高月橋を渡り、坂を登って行くと登山口に十一時頃に着いた。

登山口からはコンクリートの階段をジクザクに登って行くと、中腹の丸山公園にでた。ここは桜祭りの会場となっており、大勢の人が満開の桜を楽しんでいた。さらに少し登ったところまでひと休みする。ここからは眼下の山腹の桜や真下を流れる桂川や大月の市街が一望に眺められた。薄曇りのため遠望はきかなかったが、近くの山々が

霧で霞んで見えた。

ここから頂上を目指し十一時三十分頃に頂上鞍部の馬場跡に着くと、ここにザックをおき、松林の中を頂上の本丸跡まで行ったあと、馬場跡に戻り昼食をとりながら談笑に花を咲かせる。

食後に藤井理事の司会で自己紹介をする。その際委員会を担当されている方々から行事等の説明があり、しめくりに松田常務理事から今年予定している色々な山行と行事の説明の後一合報を見て、機会ある毎に山行や会合に参加し、仲間を作りクラブライフを楽しんで欲しい一旨の話があつた。

その後、全員で山の歌を合唱し、記念撮影をした。

一時二十分頃から、岩殿山の山腹を巻き下山していくと、ツツジの花の紅紫色が鮮やかでした。またごみを拾いながら下山する会員もいました。築坂峠まで急坂を下り、松林の道を行き、鎖場を登ると兜岩に出た。さらに天神山を越えて、浅利天神の祠の所でひと休みする。ここから十五分ほどで雉児落しの大岩壁の上を通りその西端まで行き、振り返ると百歩を超す垂直の岩壁が下まで見通せ、岩殿山や通ってきた尾根筋が良く見渡せた。ここからは急坂を下り浅利川に架かっている橋を渡り三時四十分にはバス停に到着し、そこで解散した。

そう高い山ではないが急坂、岩壁等変化もあり眺めも良かった。また会員相互の交流もでき、春の一日を楽しく過ごすことができました。お世話頂いた委員の方々にお礼を申し上げます。

(会員番号 一〇七六三)

〔三水会現地集會報告〕

房州・高岩山

三水会によって、毎月行われている現地集會に、三月(二四九回)は、房州の山・高岩山(千葉県)が選ばれた。この山が三月の現地集會の地に定着して、早や四年目になる。

高岩山は、標高僅か三二五メートルであるが、山深く、一三二五メートルと間違える位の高度感が味わえる房州を代表する山で、かつて千葉県で開催された国体登山の場になったことがある。

この山行は、千葉県在住の岡野修さんが幹事、勝田房治さんがコースリーダーとなって計画され、まず登山前日の三月二日夜、山麓の三島湖湖畔にある国民宿舎「清和」での懇親會が、賑やかに開かれた。

翌三月三日、桃の節句は無風快晴に恵まれ、絶好の登山日和となった。宿のマイクロスバスで高岩山の登山口まで行き、軽い準備体操の後、前衛峰の石射太郎山への登りにかかった。関東ふ

れあいの道と名付けられたハイキングコースを、総勢二十四名、最長老の河野幾雄さんを先頭に、約一キロの登りをゆっくりと登り始めた。例年なら見られる山桜は、今年は残念ながら未だしの感じであったが、日だまりには春蘭が顔を覗かせて、我々を迎えてくれた。石射太郎の鞍部で小休止後、小さな登り下りの続く楽しい尾根道を、高岩山に向かった。

高岩山は山頂部に岩峰を持つ山で、展望は三六〇度遮るものがなく、東は清澄に連なる樹林、西は東京湾越しに三浦半島、富士、丹沢の山々、南に下っては伊豆天城の山から上総の山へ、北は石射太郎山から、鹿野山が望まれる。頂上下に高岩観音が祭られ、天平の頃、僧行基の開山と伝えられている。また、付近一帯は野猿の棲息地で、たまに野猿に出会えることもあると聞く。十時半過ぎ、高岩観音に着き、少し早い昼食休憩となった。

二坪ばかりの岩峰の高岩山頂に、二十四名全員が立ち、景観を楽しんだ後、下山にかかった。だらだらした尾根道を八郎塚の鞍部を経て三ツばかりくだり、奥畑の集落に下りて、午後二時、今回の山行を無事終了した。

参加者 乾能尚、岡野修、片岡博、勝田房治、河合文恒、川上光久、菊池文雄、木村俊博、河野幾雄、齊藤健治、

酒匂輝昌、佐藤恒雄、塩澤厚、妹尾幸雄・津子、高田真哉、千葉保之、遠田栄、新村貞男、橋本雅子、鳩谷貴雄、平澤哲臣、平戸孝夫、横溝修一(塩澤厚)

北海道初春山行

(塩澤厚)

ニセコ山系 チセヌプリ

北海道支部

昨年は全国的に異常気象続きで、この冬も多聞にもれず記録を更新していた。こちら札幌では降雪量が、なんと六七〇にも達し、これは札幌管区気象台開設以来の記録のよう、したがって札幌近郊の山では山スキーの醍醐味に浸る人で賑わっていた。

北海道支部では、この深雪を存分に滑りまわろうと、三月十六・十七日の両日ニセコ山系のチセヌプリ(標高一三三四)の春山スキーツアーを募ったところ二十三名の会員および入会希望者の方々の参加申し込みを受け、宿を昨年ご他界された織笠 巖氏の経営するチセハウスに予約した。参加者の中には、遠く関西支部から久保三朗・阪下悦子のお二人も見えることになり、北海道支部特有の用意万端を整えた。

十六日は朝からどんよりとした曇り空でしたが、参加者それぞれがマイ

カーなどに相乗りして、昼過ぎにはチセハウスに着き、早速チセヌプリスキー場にむかい、リフトを利用して八〇〇メートルから西沢林間コースの深雪を何度も滑り降り、山スキーの素晴らしさを満喫し、とくに遠来の二人は雪の軽さに驚きと満足に浸っていた。夕方滑り終えて宿に戻り、今度は温泉に浸り、とくに辺り二層はあるうかの雪の中の露天風呂で、冷えきった身体を暖め、湯舟に浮かべたビールで喉を潤した。

夜はチセハウス名物の鍋料理と余る程のアルコール類、とくに牧田会員の持参の小樽ワインと横内会員の函館ワインの競飲?に花が咲き、夜の更けるのも忘れて飲みかつ語らいが続いた。

翌十七日は前夜のお天気まじりの甲斐もなく朝から湿った雪が降り続いて楽しみのスキーツアーを危ぶんでいたが、みんなは黙々とスキーシールを貼るもの、ヤッケに着込むもの、やがて予定通りリフトの運転開始の九時には出発が出来た。リフトの途中で濃いガスの中に入ってしまった、リフトを降りて支部青年部の岩佐会員のラッセルの後についてチセヌプリに向かった。

八五〇メートルのアメダス観測ポイントを通ると数分先はホワイトアウト、長谷川会員がデポ布を厚く付けながら進む、やがてどこに進んでいるのか分か

らないままに斜度を稼ぎ、コニーデ状の頂上を目指す。風雪激しく、耳や頬に痛みを感じながらも黙々と登り、七十歳をトップに一行十五名はチセヌプリ頂上に達したのは予定どおりの十一時、さすが山やの集団だ、頂上では缶ビールで乾杯のあとそうそうにシールを外して下山となる。

下りは先ほど上がつて来たシュプーリはもう消えていて見えず、それぞれが見失うことのないようにかたまつて降りるが、深い新雪がほどよいブレーキになって快調にアメダスポイントまで下がれた。これより下は雪質が変わっていてスキーに雪が付いて難渋しながらも全員無事に正午過ぎにチセハウスに着き、改めて残りのアルコールで登頂を祝いあった。

さらに関西の二人からは、翌十八日、新見温泉から目国内岳を往復し快晴の中にシュプーリを記して来たむねと、北海道支部の皆さんに感謝の便りがあった。

参加者 石井忠雄、石崎貞子、岩佐敏彦、亀井秀子、久保三朗、小須田喜夫、神田検二、阪下悦子、桜井仁、嶋原義昭、清水国通、野田四郎、長谷川耕司、羽根田二郎、牧田吉明、水科行雄、山川力、山下静江、横内泰美

(水科行雄)

秋田支部総会・山行報告

平成三年度の秋田支部総会は、去る四月十三日午後五時五十分より、田沢高原の水沢温泉「こがね荘」において会員十四名(非会員を含む)出席のもとに開催された。主なる内容は次の通り。

○平成二年度事業報告

○平成二年度決算監査報告

○平成三年度事業計画

山行(春・山谷薬師と貝吹岳、夏・皮投岳と俎山、秋・金峰山と奥宮岳)、婦人懇談会共催山行(秋・ニッ森と眞瀬岳)、会報発行二回、その他。

○平成三年度予算案

二十三万円(年会費千円+本会還元金で運営)

○支部会員確認

五十五名(新入会員三名、死亡一名)以上承認され続いて役員改選(委員・監事)、そして恒例の懇親会が開催された。

△新役員は次の通り

支部長(岡田光行)、副支部長(進藤昭)、常務委員(佐藤兼治、佐々木民秀)、委員(北林嘉鶴子、佐藤昭義、高橋守、宮田菊雄、鈴木要三)、監事(藤原健、打矢道雄)

なお、この日は春山支部山行として、地元三大薬師の一つである山谷薬師に登り、翌十四日、もう一つ計画された仙岩峠真上の貝吹岳を岩手側から全ルート残雪を踏んで登った。

(佐々木民秀)

ブータンヒマラヤ・トレッキング

富山支部

一九九〇年九月二十日から十月三日にわたり、会員相互の親睦と会運営の活性化を計るため、若林支部長を団長に、会員七名で西部ブータン、チョモラリコーコースをトレッキングした。空路パロ入りし、パロ川に添って北上し、黄金にゆれる稲作帯を、ドゲルゾーンに向う。車はここまでで、ポーターのいないブータンでは、装備の輸送は馬に頼うことになる。ガイドは政府の公務員で、英語を話し、馬方をはじめとするトレッキングのサポートや、チェックポイントなど、入国から出国までの世話をしてくれる。

遊牧の国ブータンでは食糧事情がたいへんよく、酪農国ならではの献立が多いようである。パロから十七キロでシヤナサンポに着く。モンズーンのパロ川は水量も多く、路はぬかるみ、さらには馬脚による耕耘で痛みがひどく、みる間に下半身がチョコレート色に変色する。

さらに四十一キロ、標高四二〇〇メートルのここパロ河の源流まで急流をへつり、急崖を高巻きしながら暗い針葉樹林帯を抜け、途中ソイタンタンカを経て二日間、ジャンゴタンに着く。石積みの小屋を配した広い草原は、チョモラリ(七三二四メートル)、ジチュダケ(七〇一二メートル)のB・Cの位置にあり、すぐ近くにモレーンがある。

ゾン跡はチベットからの侵攻に備えたと言われ、未だに開放されない国境の山に対する政府の慎重さが伺われるようだ。ここで馬からヤクに交替しニレラ(峠)四八〇〇メートルに向う、堆積岩屑に覆われた峠は無毛帯で、石積みはためくタルチョが私達を迎えてくれた。ニレ峰から派生する尾根を下ること約十五キロ、標高四二〇〇メートルのリュジゾーンは、今回のルートでは最北端で深い谷の合流で、シヤクナゲ、ナナカマド、ハンノ木など、北アルプスで馴染みの灌木が群落し、彩りを添えて秋を感じさせる。

ルートを南にとり、ヤレ山群(五〇〇〇〜五七〇〇メートル)のヤレラに向う。途中遊牧民がバオから出て見送ってくれる。ブータンは雪線以上はすべて放牧地であり、そのため生水は飲料に適さず、水生動植物は貧弱である。

ヤレラ(四九〇〇)を越えると思
インプ川は狭谷化し、黒部峡谷を思
わすゴルジュ帯が続く、氷河からの水
は谷に霧を発生させ、緑濃い森林が峽
谷を覆っている。樹木はサルオガセに
覆われ異様である。自然保護か経済
か、手を加えない路は、延々と続く迂
回路と、高々と延びる高巻路をつく
り、ぐちりながら一二〇〇のトレッ
キングを終え首都ティンブーに着い
た。(太田 昭)

三水会現地集会

御正体山と石割山

道志村は国道四一三号に沿った峡谷
に、延々三〇〇(七里十八丁)展開す
る山村である。西は山伏峠で山中湖と
区分されている。南側は山伏峠―石保
土山―菰釣山―城ヶ尾山―大室山に至
る丹沢の連山により、北側は岩道峠か
ら赤鞍岳―菜畑山―今倉山―道坂峠―
御正体山(山伏峠)―石割山に至る道
志連山により挟まれた細長い山里であ
る。御正体山は信仰の山であり大きな
山容を持っている。南の山裾には長又
と白井平の集落があり、道志村の最奥
の集落で、道志川の源頭地帯である。
道志川の水は、赤道越の水と言われ、
横浜水道の水源。

今回は御正体山に変わったコースか

ら登ることになった。四月二十七日、
午前十時、都留市駅に集合し車で道坂
峠(海拔約一〇〇〇)に向う。旧ト
ンネルに下車し、峠の山神に入山の許
しと安全を祈り、中先生の神酒を山神
に注いでから、全員で体操をして清澄
な空気で体力調整を行う。十時四十分
に植林地の急坂を登り尾根に向う。三
十分で藪尾根にとりつき一二〇〇―
三〇〇の尾根を西に向った。この尾
根は登山地図からみれば不遇の尾根で
藪が売りもののコースだ。午後一時半
に道志からの正規登山道に合流し、御
正体の肩に至り、ここから五十分の急
登となる。肩から上は、ブナ林の急尾
根となり、三十度以上の急な稜線とな
る。

二時二十分山頂に至り全員で乾杯を
して、白井平に向って急降下する。山
頂はガスに包まれ、未だブナの芽は固
く閉じていた。丹沢山岳忍考「さる」
のごとく平澤氏の一団は坂を駆け下っ
てゆく。

坂の沢に至り御正体・沢と出合い白井
平にたどりつく。水セリや山葵の生え
る道を進むと「長又」に入る。民宿中
村荘の池谷氏の出迎えを受けてからひ
と風呂となる。中村荘は一切の妥協を
許さない純日本式豪屋で檜、樺を使っ
ている。

午後六時、山峡の幸を使った手作り

料理を組にして山宴が始まる。多士
済々の宴は夜半に及び、甲斐の七賢を
一斗余升、ビール百本を飲み干した。
二十八日は快晴、村里は椿、梅、桜
山吹が一齐に花宴を開いていた。山伏
峠に至ると野焼の煙の上方に白雪の富
士山がくっきりと展開していた。峠か
ら石割山に向うと美しい林相が続き、
小鳥達のさえずりを録音でもしている
ようにバイケイ草が耳をそば立ててい
た。

石割山頂で昼食を兼ねた毒舌会を持
ち、笹道を急降下し、石割権現に至り、
狭い割目を通り岩清水を拝飲し心身の
健康を祈った。午後三時臥牛湖平野に
至り解散となった。

〔参加者〕荒木正弘、池田和美、岩堀
瑞子、小川光則、尾身茂、木村俊博、
菊地文雄、河野之保、斎藤健治、斎藤
桂、酒匂輝昌、佐藤之明、遠田栄、遠
田篤子、富田郁夫、高田眞哉、中保、
橋本雅子、鳩谷貴雄、樋口公臣、平井
拓雄、平野武利、平澤哲臣、山村正光、
横溝修一、吉武玲子 (佐藤之明)

会務報告

評議員会

四月十八日 十七時三十分

場所 本会議室

出席者 山田会長、藤平副会長、鴨原、

小倉、橋本、平林、大島各常任評議員、
大塚、日下田、川上、吉村、沢村、室
賀、河野の各評議員、松田、藤井の各
理事
理事
〔委任出席〕村木副会長、杉野目、山
野井、佐藤、今西の各評議員
議事

(1) 役員候補者推薦の件

本年は役員の改選期に当たるので、
細則第七八条にもとずき、再任者を
除く、副会長一名、理事七名、監事一
名の各役員候補者を夫々選任の上推薦
したい旨の説明があり、審議の結果次
の通り候補者として推薦することを決
める。

〔副会長〕松田雄一、〔理事〕小倉茂
暉、大倉昌身、村井龍一、片岡泰彦、
山口俊輔、大森弘一郎、南川金一、
〔監事〕中島伊平

(2) 細則改訂の件

委員会組織の見直しに伴い、細則の
第一―四条を、また細則の内容が実態
にそぐわない第十一―十一条、第二十
―二十二条(注第十一―十一条は削除さ
れているものを修正の上復活)も併せ
て改訂したい旨、原案の説明があり、
検討の結果、原案通り承認する。

(3) 通常総会提出議案承認の件

定款第三十二条にもとずき、理事会
が作成した原案を、評議員会としても

承認することを了承する。

四月理事会

四月十八日 十八時四十分
場所 本会会議室

出席者 山田会長、藤平副会長、松田、西村、入沢、小倉、穴田、石橋、関口、織田沢、松本、神崎、伊丹、藤井の各理事、橋本、小倉、平林、大島の各常任評議員、河野、吉村両評議員
〔委任〕村木副会長、重広、早坂両理事、太田、飯野両監事、嶋原常任評議員

議事

(1) 役員改選の件

細則第七条、八条にもとずき、評議員会より推薦のあった、副会長一名、理事七名、監事一名の新任者につき、夫々承認する。

(2) 評議員候補者推薦の件

再任者を除く十名の候補者として次の各氏を推薦することを承認する。

西丸震哉、村木潤次郎、徳久球雄、鈴木郭之、国見利夫、齊藤淳生、湯浅道男、田部井淳子、廣江研、西村政晃
(3) 平成二年度事業報告の件：承認
(4) 平成二年度収支決算報告の件

収支計算書、正味財産増減計算書、貸借対照表、財産目録につき報告あり、夫々承認する。引きつづいてナムチャバルワ偵察隊の収支決算報告の説明があり、一四、七二〇、一四六円の支出を

承認する。

(5) 監査報告

両監事により四月十一日行われた、監査の結果は、何れも正確かつ適正に処理されている旨の文書による報告が行われた。

(6) 細則、支部規定改訂の件

評議員会、支部長会議において夫々検討された原案につき説明があり、これを以て、総会に付議することを了承する。

(7) 平成三年度末滞納除籍予定者の件

五十二名がリストアップされているが、総会迄に極力納入してもらう様重ねて努力することとする。

以上を以て、既に三月の理事会で承認されている平成三年度事業計画および収支予算案を含め、定款第三十一条により通常総会に付議すべき、全議案が承認されたことを併せて確認する。

(8) ナムチャバルワ登山の件

五月一日に議定書の調印が行われるが、議定書に明記される副総隊長、登攀隊長の氏名を次の通り決定したい旨の説明があり、これを了承する。

副総隊長 村木潤次郎、登攀隊長 高見和成

(9) 山研改築の件

会報五五〇号で設計図を公表したところ四名の会員より、アドヴァイスを

次代に残そう美しい山と溪

頂いた。参考にしていきたい。

(10) HAT-J 報告

四月十六日募金委員会が発足、本格的募金活動を開始した。六月の二、九月は、清掃登山週間として、HAT-Jとして活動するので、各支部でも協力願いたい。(神崎)

HAT-J 富山会議を、十一月十一日より、富山で開催の予定。来日される各国のトラスティの方々を立山に案内したい。(藤平)

(11) 各委員会報告

① 自然保護(松本)
四月五日の「山小屋におけるし尿処理」をテーマとしたシンポジウムは反響があった。
自然保護全国集会は、越後支部の協力を得て六月二十九、三十日、新発田市で実施の予定。

② 総務(藤井)

四月十四日、新入会員歓迎さくらハイクを岩殿山で行った。

柴田篤志会員の好意で、会議テーブルが寄贈されるのを機に、ルームのレイアウト変更を検討したい。

③ 山研(石橋)

四月二十七日開所予定。

(4) 海外(神崎)

ヘックマイヤ夫妻の歓迎会を四月二十五日開催の予定。

十月十六、二十日、スポーツライミング、ワールドカップ東京大会が日山協主催で行われるが、本会の協力もお願いしたい。

(5) 資料(織田沢)

談話室内の陳列棚が暗いので、蛍光灯を設置したい。

(12) その他報告事項

① 三百名山資料刊行の件

刊行準備はほぼ終わっているが、標高に問題があることが判明したので、六月三日の国土地理院による「日本主要山岳データ表」の公表をまって、修正した上で印刷にかかりたい。

② アテネ書房より協力依頼の件

「ケルン」の覆刻版刊行に伴う記念出版として「日本人による八〇〇〇峰の登頂」を出版する計画があり、文献調査で協力して欲しい旨の依頼があったので協力することにし度い。

③ Thr Mountain Summit '91 in Tokyo の件

五月七、十日ホテル・ニューオータニで開催される。

テーマ 「ヒマラヤと環境保全」

(映画、ビデオ、スライド)

司会 北村節子

講師 ①堀田弥一 ②今西寿雄 ③高見和成 ④そして将来 大西宏

を中心にパネラーおよび参加者全員による討論。(資料代五〇〇円)

●第11回日本登山医学

シンポジウム

日本登山医学研究会は日本国内外における登山活動の安全のために必要な医学的知見の進展と普及を目的として活動しています。

今回のシンポジウムは、人口の高齢化、科学技術の進歩、情報化、国際化等々社会構造の変革とともに益々多様化していく登山を踏まえて21世紀医学の登山への導入のあり方についても考えてみたいと思います。

会員並びに一般の皆様方大勢のご参加をお待ちいたしております。

会期 七月十三日(土)午後一時

七月十四日(日)午前九時

午後四時

場所 北里研究所 北里本館

(〒108東京都港区白金五・九一)

交通 都営バス 渋谷東口(田87)田町行 約十五分(北里研究所下車)

車、営団地下鉄日比谷線 広尾下車徒歩八分

参加費 会員および一般の方も無料

(会場の都合で三〇〇名まで入場可)

特別講演

一、医学の進歩がもたらす未来社会の諸問題 東大名譽教授 渥美和彦先生
二、高齢者登山について 元昭和大学藤が丘病院院長・東大名譽教授 小林太刀夫先生

シンポジウム

高所登山における循環動態 パネルディスカッション
多様化する登山に対応する医療はいかにあるべきか

(お問い合わせは左記へ)

事務局 〒108港区白金五・九一 北里研究所病院・研究部 パイ

オメディカル ラボ内 第11回

日本登山医学シンポジウム係

☎〇三三三四四一六一六

●女性懇談会全国集会

さきにお知らせしましたが仔細は左記の通りです。

十月十二日(土)午後

白神山麓八森町集合(五能線

八森駅下車)

十月十三日(日)

二ッ森・または夏瀬岳登山

会費 八五〇〇円(宿泊・雑費)

申込み締切 九月五日 女性懇談会宛

申込みいただいた方には九月中旬頃返信をさしあげます。

男性も歓迎します。

白神山はブナ原生林を分断する林道の問題で関心を集めました。人間と自然のかかわりを考える集まりになればと思っています。

問合せ 秋田支部 佐々木民秀

☎〇一八八三四一〇八三六

婦人懇談会 穴田雪江(夜間)

☎〇三三三九二五五五三三

秋田支部 宮城支部 女性懇談会

●湿原と高山植物探索山行

科学研究委員会

期日 七月二十日(土)および二十一日

(日)

講師 小荒井実氏および宅間清子委員

協力 福島支部

宿泊 湯の花温泉旅館清瀧

☎〇二四一七七八二二二四

集合 東武鉄道会津高原駅

二十日十時半(または十六時)

二十はバスにて駒止湿原見学。

行動 旅館清瀧にて「湿原と高山植物」講演会および懇親会

二十一日 田代山、帝釈山登山

(四時間) 温泉入浴 会津高原

駅

人員 三十五名、先着順

申込 会員番号、氏名、年齢、会津高原駅着時刻を記し、葉書で日本山岳会科学研究委員会まで。

申込み締切り期日 七月五日まで

費用 一万八千円。非会員は千円増

注 探索山行の詳細については、参加申込者に連絡の予定。

●藤江幾太郎・山の画展・第三六回

七月一日(月)〜七日(日) 一一・〇〇

〜一八・三〇

(最終日一七・〇〇)

■朝日アートギャラリー

JR有楽町。地下鉄丸の内線銀座C4。中央区銀座四一〇〇(朝日旅行センター奥)

電 三五三五一七七四〇

■油絵新作一〇〇号〜三三三三号約二〇点出品のほか、ネパール画集刊行記念室を併設します。

平成三年六月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 山田二郎

編集代表 小倉厚

電話 東京(326)四四三三

振替口座 東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一三三六

赤坂グレースビル

印刷所 株式会社 技報堂